菊地清明氏（元大平外相秘書官）に聞く

池田内閣の外相時代

—聞き手・阿部　穆

ノルウェー、スウェーデン、デンマーク北欧３カ国を歴訪する大平外相に随行時の１コマ。左から大平裕氏（現大平財団常務理事）法眼晋作欧亜局長、菊地清明秘書官、２人おいて大平外相。（1963年８月26日～９月９日・オスロのノルウェー大使公邸で）

大平外相を迎える外務省の微妙な雰囲気

――大平さんが外務大臣に就任されたのは、池田勇人内閣の内閣改造が行われた昭和三七年(一九六二年)七月一八日のことです。それまでは内閣官房長官であって、外務省の方々とも接触する機会は非常に多かったのですけれども、改めて外務大臣として迎えるということになった時に、外務省内の大平外相を迎える雰囲気というのはどうでしたか。菊地さんは、大平さんの第一次外務大臣の時、最初から最後まで秘書官として補佐されたわけですが。

菊地　大平さんが外務省へ見えた時は、必ずしも何か全然、知らない所へくるという感じじゃなかった、ということはそのとおりですね。ご承知のように、官房長官というのは定例的に外務次官から報告を受けてますし……。それで、その前後から外務省としては総理官邸及び官房長官との連絡というものを非常に重要視するようになっていました。ですから、既に二年間、官房長官のポストにあったわけですから、大平さんとしては、外務省というのは知らない所ではなかった。他方、これを迎える外務省幹部は、武内龍次次官などはよく知っておられたわけですけれども、他の人はあまり大平さんに馴染みがない。殆ど唯一の例外は黄田多喜夫さんで、あの人はインドネシア大使から帰ってきて外務審議官になったわけですけども、島重信さんの後ですね。黄田さんは大平さんのことを前から知ってるし、大平さんも、「黄田さん、黄田さん」と言って、非常に黄田さんを重用した。私が秘書官をやっている間、はじめ半年ぐらいは武内次官でしたけども、そのうち島次官になりました。島次官よりも大平さんは黄田さんを重用したと言いますか、何かというと私に「黄田さんを呼んでくれ」と

指示があるわけですね。その後も、まあ後から出てくると思いますけども、周鴻慶事件のハンドリングなんかも、勿論、アジア局が中心ですけども、黄田さんを議長にして会合を何回も持ったというようなことです。

――黄田さんとウマが合って、重用したというお話しですが、黄田さんと大平さんとの接点というのは何ですか。

菊地　それは、やっぱり広島県出身じゃないんですかね。つまり池田（勇人）さんが広島県出身だということで……。ですから、そういう意味では、あまり広島県のことだけ言うのはおかしいかも知れませんけども、後で経済局長になった中山賀博さんも、広島県の尾道の出身で、この人も非常に大平さんとは近かったような気がしますね。逆に言うと、島さん始め当時の外務省の幹部の大半は、大平さんよりも大学卒の年次的には上の人ですからね。大平さんとしては、ある程度、緊張したような感じはあったんじゃないかと思います。

――なるほど、そういう雰囲気だったのですか。

菊地　従来、外務大臣というのは、少なくとも派閥の領袖とか、次には総理大臣になるような人ないしは副総理というような人がなっていましたですね。その前は、外務省の先輩で政治家になった吉田茂、芦田均という人達が、ずうっとなったわけですけども、まあ大平さんという初めての閣僚経験者が外務大臣になったということで、省内ではまあある程度、期待もしていたと同時に、正直言ってお手並み拝見という気分もあったんじゃないかと思います。最初の外務省員に対する挨拶でも、いわゆる大平節で非常に平明な話し振りだったんで、かなり外務省員、殊に女性の職員なんか非常にチャ

ームされたんじゃないかと思いますね。

──大平さんが大蔵省出身ということで、外務省対大蔵省という心理も、あったんでしょうか。

菊地　それを、ないと言ったら嘘になりますね。やはり外務省というのは、しょっちゅう大蔵省と拮抗していると。外交を実施するための予算というのは、絶対に必要なわけですが、その予算を握っている大蔵省に対しては、ある種の感情を持っているわけですから。そういう意味では、逆に大蔵省出身の大平さんが外務大臣になってきたから、これは外務省にとって予算獲得上、有利になるかも知らんという、そういう期待もあったと思いますね。

一方、大平さんの方は外務大臣になって、日本外交に関して非常に壮大な抱負とか経綸とかいうものを持って入ってこられたかというと、私は身近にいて、必ずしもそうは思っていなかった。あの人は非常に謙遜な人ですから、そういう身構えたことはする人じゃありませんので、始めからそれは予想がつくことですけれども。それにしても、「自分は外務大臣として初めてなるんで、これからは勉強させて貰います」というような非常に真摯な態度だったんじゃないかと思います。

──あまり身構えないで外務省に入って行った……。

菊地　基本的な外交に対する態度はどうかというと、やはり第一に言えることは、非常にオーソドックスな外交をやろうとしたんじゃないかと思います。それは大蔵省には大蔵省の財政政策の伝統があるように、外務省にはおそらく外交の伝統というのがあるに違いないということで、やっぱりオーソドックスな外交をまず身に付けると。その具体的なアプローチとしては、やはり吉田茂さんに学ぼうということだったと思いますね。それは、池田内閣の官房長官の頃からでしょうけれども、機会あ

るごとに吉田さんの所へ行ってましたし、これはまあちょっと下世話な話ですけれども、大平外務大臣が外遊して帰ってきたら、必ず吉田さんには報告する、かたがた葡萄酒の一箱を持っていく。そうすると吉田さんは非常に歓迎して――吉田さんは大平さんを非常に好きだったし、最初の選挙に出る時から吉田さんは応援しているわけですから――眼を細めて「大平君、現ナマで苦しうないよ」(笑い)というようなことを言っているのを、私は側で聞いておりました。

――吉田さんに学ぼうという姿勢でしたか。

吉田式の日米協調の外交政策を信じて

菊地　大平さんはやはり吉田式の外交政策の伝統、対マッカーサー政策ですね、それから単独で日米安保条約をサインしたというような吉田さんの勇気というか、そういうものに対して非常に尊敬したんじゃないかと思いますね。それが一つのオーソドックスな外交……。オーソドックスな外交とは何かというと、やはり、これはある意味で伝統的なバランス・オブ・パワー(力の均衡)外交ですよね。で、大平さんのいろんな言ったこととか書いたものをよく読んでみますと、少なくとも第一回、第二回の外務大臣に至るまでは、やはりバランス・オブ・パワーというものを一応、基礎にした外交をやっておられた。勿論、その基軸にあるものは、日米協調ということですね。で、日米協調ということについて言えば、ライシャワーさんの言葉ですけれども、「自民党の政治家の中には親米的な人は非常に多いけれども、大平さんがもっとも親米的だったんじゃないか」というようなことを言って

おりますけれども、本当に、根っからですね、親米というもの、日米協調というものを、信じていたんじゃないかと思います。

——基軸は日米協調でしたね。

菊地　それから、もう一つ日米協調を言ったのは、やはり、大平さんがよく私に言ってましたけれども、占領中にアメリカから受けたガリオア・エロア資金、殊に占領中に日本が非常に飢餓状態になった時に、アメリカがトウモロコシその他で援助してくれたということに関して、自分は非常に感謝している。それをどこから聞いたかというと、津島寿一さんが戦争直後の東久邇内閣で大蔵大臣をしている時に、大平さんが秘書官として、大臣の部屋へ入って行ったら、津島さんがハラハラと涙を流していると。その話を知ってますか。

——ええ、知ってます。

菊地　これも、やはり記録としては残しておいたらいいと思うのですが……。大平さんが「大臣、どうなさったのですか」と言ったら、津島蔵相は「実は明日からの国民に対する食糧の備蓄も尽きたんだよ」というようなことを言って、それを嘆き悲しんでおられたというのを目撃していると。それで、やはり大平さんは占領中におけるアメリカの援助に対して非常に感謝しておるんじゃないか、と思うんですね。それが一つ、大平さんが親米的というか、日米協調を非常に大事にした姿勢の根底にあるものではないかと思います。

それからもう一つ、大平さんの哲学というか考え方で、やはり内政と外交の一体化ということを、非常に言いましたですね。それは、「外交は内政の外部的表現である」とか、いろんな表現の仕方が

ありますね。それから、これはちょっと飛びますけれども、「日中問題は日日問題である」とか、そういう言い方をする時は、やはり外交と内政との大変な連関性というんですか、関連というものを、身に沁みて感じておられたんじゃないか、と思いますね。大平さんとしても、自分は官房長官であると、それから池田さんの参謀というか、国内政治にも通暁しておられる、というようなことから、やはり自分として日本外交に貢献できるとすれば、内政と一体化した、ないしはある意味では与論を結集した外交をやるということ。それから真に必要であれば日本の国益のために、ある一定の外交方針を執らなければならない、と。しかし、それが国民にとって不評であるとか、自民党の一部にとって不評であるという時でも、それはやはり、やらなくちゃいけないと。それをやれるのは自分じゃないか、というような一つの気概というか、自信というか、そういうものもあったんではないか、というふうに思いますね。

――当時の日本の外交というのは、安保騒動の後で、小坂善太郎前外相もだいぶ苦労されたわけですけれども、日米関係をどうするか、特に当時の日本の国力はそう大きなものじゃなかったし、アメリカの日本に対する関心を惹き付けておくために、いろいろ苦労されたと思います。それから、もう一つは、ＯＥＣＤ（経済協力開発機構）とか要するに世界の中の日本というものに入って行く、国際経済の中へ入って行くというわけで、まだ日本はそれほど大きな力もなかったし、それこそ池田総理も外遊されて、ドゴール仏大統領に「トランジスタのセールスマン」とか言われたような時代でもあったわけですけれども……。

菊地　政治的には安保騒動の直後で非常に緊張した雰囲気で、安保騒動は当然、日米の政治的な関係

では確かに緊張状態があったわけですし、他方、日本の国力もたいしたことはない。ちょうどその前年に、池田総理が所得倍増計画をやって、これから飛躍的に経済発展を遂げようという時ですね。ですから、経済的には発展、政治的には国内的な対立の癒しの状況にあった。それが全体的な雰囲気だったんじゃないかと思うのですね。で、大平さんとしては、こういうところで外務大臣になって、やはり一番配慮したのは対米関係、日米協調だと思いますね。この対米関係を大平さんがよく使う言葉で「自分の身分相応の」、日本の力に合ったような日米関係というようなものを築いて行きたい、というようなことがあったんじゃないかと思いますね。そこで非常に幸いしたのは、その前年ですかライシャワー大使が赴任してきたことです。大平さんとライシャワーさんとは、生まれた年も同じというようなことで急速に親しくなって、それでライシャワーさんとは新聞記者をまいて、霞友会館で定期的に会っているというようなこともあったくらいですから。この点は、非常にうまくいったんじゃないかと思います。

――日米間に閣僚会議、即ち日米貿易経済合同委員会が設けられたのは、その少し前ですね。

菊地　池田内閣時代は、所得倍増という高度成長政策で記憶されているわけですけれども、日米関係で一つ非常に大きな仕事、余り派手じゃないですけども非常に大きなことがあったのは、一九六〇年に日米貿易経済合同委員会というのができたことですね。あれを作ったということは、これは外務省の加藤匡夫氏とか、そういう人達が実際は根廻しして作ったんですけども。その時の外務省の考えは、アメリカはカナダとの間に、そういう合同委員会を持っているんではないか。日本も、これからは所得倍増計画で経済を伸ばしていくんだから、最大の貿易相手国であるアメリカとの間に、こういった閣僚合同委員会みたいなものを持ちたいというようなことを言い出して。これは日米どちらから

ともなく言い出されたことなんですが、これでできた。一九七七年にキッシンジャー国務長官がきて、これをぶっ潰すんですね。これは非常にひどいことをしたと思うんですけども、これまでずうっと連綿として一七年間か何か続いたわけですよ。これが一つの池田内閣の対米関係では大きな仕事なんですね。殊に経済重視の、貿易重視の池田内閣としては、この委員会があったことで、いかに日米関係の摩擦というものが悪化しないですんだか、ということに役立ったんではないかと思いますね。それが対米関係ですね。

——いま、おっしゃった日米貿易経済合同委員会というのは、私は実は第一回から取材して、箱根に行ったこともあるんです。第一回は箱根で、第二回はワシントンであったと思いますが、その時に、大平外相——最初は官房長官で、後から外相になったのですが——は、「アメリカというのは世界の大国で、四六時中、世界の百何十カ国ぐらいを相手にしていなければならない。それが国務長官以下、主要閣僚が揃って東京にきて、あるいはワシントンで、少なくとも二日間は日本だけを相手に交渉をやるということになったら、やることだけで意味があるんだよ」と言っていましたね。

日米貿易経済合同委員会の大きな意義

菊地　そのとおりです。

——「だから、その二日間をアメリカの閣僚連中を釘付けにするということで、それだけで成果は上がるんだ」ということを言っていましたがね。これは、やっぱりさっきおっしゃったライシャワー

大使との合作といいますかね。やっぱりライシャワー大使の存在は、非常に大きかったんじゃないですかね。菊地さんが傍から実際に見ておられて、二人は非常に個人的にもサイクルが合っていたんじゃないですかね。

菊地　そうですね。その通りですけども、ライシャワーさんは非常に良かったんですが、ライシャワーさんをバックアップする国務省のアジア・太平洋局に、非常にいい人がいたんですね。ロバート・バーネット、後に国務次官補になった人ですが、こういう人とか、リチャード・フィンだとか、ディック・スナイダー、そういう人達がいて、在米大使館との連絡も良くて。その時は安川壮参事官、加藤匡夫参事官らがいて、非常に良かったわけですね。それで、日米貿易経済合同委員会ができ上がった。あれの本当の誕生は、ゴルフ場だったということです。

――それはどういうことですか。

菊地　それはロバート・バーネット氏と加藤参事官がゴルフをしている間に、アメリカとカナダでやっているのなら、日米でやってもいいじゃないかということで、これがトントン拍子で進んだのですね。

――ライシャワー大使をバックアップするケネディ大統領といいますかね、ホワイトハウスの、意向とか、あるいはラスク国務長官以下の国務省の意向とかというのは、相当あったんじゃないですか。

菊地　それは、あったと思いますよ。ただ、これは後から出てくると思いますけれども、ラスクさんという人は、ブッダ・フェースといわれたように、非常に温厚篤実、慎重な人であり、あんまり自分でなんかアイディアを持って何かやるというような人じゃないんですね。ですから、ラスクさんのメモワールには池田のイの字も大平のオの字も出てこないそうですね。

――そうですか。ラスクさんのメモアールは、アメリカで出てるようですね。

菊地　出ている、ということがどっかで書いてありましたよ。ラスクさんというのは、あんまり日本には関心がなかった人だなあと思います。あの人は、カリフォルニア出身のクレアモント大学の先生をしていた人ですけどね。だからアジアには関心を持っているはずなんだけども、あんまりそういうアイディアのある人ではなかったような気がしますね。ですから、それは一つはライシャワーさん、ライシャワーさんの強力なバックアップがなくちゃ、こういうことはできないわけですから。これと、国務省の、その当時の日本課を中心にする……。これは、だから日米関係の昂揚期ですよ、ある意味で。

――そうですね。

菊地　安保問題で若干、破綻とは言えませんけど、ちょっとサワーになった、酸っぱくなった日米関係というものを、経済関係の親しさということで補強して行こうというようなことだったんじゃないかと思いますがね。ただ、その翌年（一九六三年）に利子平衡税という問題が出てくるのですね。これは、やっぱりショックでしたね、日本にとっては。これだけ日米経済関係がうまく行っているのに、なんで利子平衡税なんだ、ということですけれども。これは、アメリカがちょうどその時に国際収支特別教書というものを出していたので、これは別に日本を狙い打ちにしたわけじゃないんです。ところが、その時またカナダが出てくるんですが、カナダには特免したんですよ。それで日本の大蔵省は、それはおかしいと言い、この時もカナダを引き合いに出して、利子を特免にしてくれということを主張した。そのために一九六三年の七月、大平さんが利子平衡税の交渉に行ったのですよ。

――あれは、最初は宮澤喜一経企庁長官が行く予定だったのが、宮澤さんが急性盲腸炎になって、そ

実　就　華　去

れで池田総理が、じゃ行ってくれということになって、大平さんがあたふた行ったんです。それで、ニューヨークへ行ったら、ニューヨークの経済人がロックフェラー氏以下、親切にしてくれた、「大平さん、心配することないよ」と。それで非常に心強くなって帰ってきたということを記憶していますね。

菊地　その時に、ニューヨークで一番、親身になって世話してくれたのは、亀徳正之領事ですよ。亀徳さんは、大蔵省の財務官でニューヨーク駐在財務領事だった。亀徳さんは、大平さんよりちょっと後輩ですね。あの人は、昭和一五年か一六年入省の人じゃないかな。あの時はアメリカの財界人、全部に会いましたよ。あの時、財務長官はダグラス・ディロン氏ですから。ニューヨークに行ってほとんど、あの頃のジョン・リードだとかホワイトヘッド、それからデービッド・ロックフェラーなど財界人が全部、会合に出てきましたよ。

――日米関係で非常に厄介だったのは、原子力潜水艦の寄港問題だったですね。後になって、ライシャワーさんが原子力艦艇の寄港問題について、大平さんはコミットしたかのようなことをどこかの新聞にしゃべって、ひと騒ぎあったですね。その当時、原子力の問題というのは、非常にややこしかったのですか。

原子力潜水艦の寄港問題

菊地　これは、ちょっと私の想像も入るんですけれども、大平・ライシャワー会談というのは、一説によると、大平さんがアメリカ大使の公邸に行って、話したということになっているのですが、外

務大臣がアメリカ大使の公邸へ行くということはないんです。霞友会館での話でですね、この話が出たことは出たんですね。その時の「確かに承知しました。問題の所在は判りました。私はこれを処理するから、あなたはこのことは他の人に一切、言わないでくれ。私、限りにしておいてくれ」というようなことを言ったということになっていますね。

——そうです。

菊地　そこまでは私、確認できないんですよね。ところがライシャワーさんの記録によると、その後、ピタリと世論も何もそれを問題にしなくなった、というので、自分は助かったというようなことを書いてありますよね。ところが、その後また数年経って、これを確認するというようなことになって、大平さん自身は「三原則ではなくて、二・五原則でいいじゃないか」というようなことを言ったんだけども。それは「そんなことを言ったら、あまりにも危険ですよ」と周囲に言われて——あの側近は誰ですかね——大平さんがしぶしぶ下りた、という話につながるんですが……。ただ、大平さんがノーチラス型の原子力潜水艦の寄港を認めたということは、例のポラリス型のような核兵器を積んでいる型とは違う、という建前になっているわけですね。ですから、大平さんは、そこで一計を案じてというのはおかしいけども、大平さんが到達した結論は、一つは原子力をただ推進力として使っているものであって、これを殺傷のための武器に原子力を使っているのではない、ということを非常に強調していた。もう一つは、しかし、それでも野党は安全か安全でないかということを問題にするんなら、安全性の確認というのは、科学的、実証的にやるべきじゃないか、ということを言い出したんですね。これで、この問題は一応、処理したということです。

――大平的決着のつけ方ですか。

菊地　そうです。大平さんの問題処理型というのが、ここに典型的に現れていると思うのです。というのは、非常にある時には感情的になりがちな大きな問題は、ずうっと熱を下げて温度を下げて、その事実関係、技術的なレベルにすとんと落して、それでいま言ったように、安全性の問題だとか、それから法規の問題だとか――これは後からも出てくる周鴻慶のような場合には、国際法上どういう法規になっているんだとか、国内の入管法上はどうなっているんだとか――そういう法規のレベルに落してみる、法律関係に落してみるというようなことが、大平さんの一つの非常に手堅い外交問題処理の手法ではなかったか、と思いますね。

――日米関係はこれで一応、終わりまして、その次の大きな問題は韓国との問題だったと思うのです。大平外相が在任中にこの問題は、金鐘泌氏との会談で正常化への第一歩を踏み出すわけですけども……。

韓国の対日請求権問題について

菊地　請求権問題の解決ですね。

――大平外相が、そこで金鐘泌氏と話をつけるまでの間、いろいろ水面下ではあったんでしょうけども、ほとんど日韓関係改善の動きはなかったんですね。一九六一年に韓国で軍事クーデターが起こり、朴正熙政権ができる。金鐘泌氏が中央情報部長になって日本に来たのは、一九六二年の一一月で、

その時に請求権の問題がポッと出てくるわけです。これが後に佐藤内閣になって日韓の正常化につながるわけですけども、やはり金鐘泌氏自身も一九九九年秋、日本にこられた時に私は金氏の話を聞いたんですけども、その時に「昔のことを言うと、山のような大きな決断をした人がいた。私はその人のことを忘れることができない」と言うわけですよ。これは私は、どう考えても大平さんだろうと思うのですよ。「山のような大きな決断をした人。今日の日韓のこれだけの交流の基礎を拓いた人は沢山おられるけれども、最初に山のような決断をした、私もその当事者であった」と言われたですよ、ハハァーと思ったけれども。実は日韓の請求権の問題というのは、突然、出てくるわけですけれども、これは何か伏線があって出たのか、そこら辺はどうだったのですか。

菊地　それは六一年に朴正熙氏らがクーデターを起こして、最初は大統領代行になったが、クーデターだったから不評だった。大学生のデモが起こるわけですから、朴正熙氏としては日韓関係をある程度、正常な状態に戻して経済的に復興して行こうというような意図もあったんじゃないかと思いますね。そこに中央情報部長の金鐘泌氏がいて、これが日本語も非常にうまい人で、じゃ交渉しましょうということになったんだろうと思うんですね。

——外務省での大平・金鐘泌会談ということになるわけですね。

菊池　それで金鐘泌氏が来て、大平・金鐘泌会談となる。その時の状況については、いろんな説があって……。私はその時、大臣室での会談には入りませんで、隣にいたわけですが、会談の途中で、時々、大平さんが出てくるわけですよ。そして、総理官邸に電話するわけです。その時は私は、池田さんに電話したんじゃないかと思ったんですが、実はあの時、池田さんは外遊中だったんですね。ど

実就華去

うも、あれは黒金（泰美）官房長官にかけていたような気がしますね。黒金さんは、大平さんと同じ大蔵省出身で、しかも一年先輩の秘書官で、池田さんの腹心ですから、恐らく大平さんとしては黒金さんの同意を得ておいたほうがいいと思って、時々、出てきては電話したんだと思うんですね。

――交渉自体はどうでしたか。

菊地　これは、いろんな回想や記録に出てますけれど、一番、確実だと思われることは、金鍾泌氏としては六億ドル＋アルファーというものを請求権として受けたいという感じがあり、日本側はせいぜい有償、無償合わせて三億ドルどまりというような感じが、交渉前の状況だったんじゃないかと思うんですね。それに対して、ものの記録によると、大平さんは「自分は池田さんから八〇〇〇万ドルまでしか授権されていない」というような言い方をするわけですね。これは、大平さんとしては珍しい駆け引きがあったんじゃないかと思うんですが、これに対して金鍾泌氏が「とんでもない」と非常に怒って、それで「まあまあ」ということで、大平さんは――これから先は私の想像ですけれども――無償一億、有償二億、計三億ドルで出したと思うんですね。これは確かなんですけれども、アジア局もそういう考えでしたから。日本としては無償よりも有償を大きくしようという基本的な考え方があったわけです。ところが韓国のほうは、無償を大きくして有償を小さくということですね。だから最後まで、日本は二、三と言い、韓国側は三、二と言うようなことで行って、それが結局は、話が飛びますが、のちに大野伴睦氏が韓国へ特使で行って、そこで三、二という組み合わせを呑んだんじゃないかと思いますね。正確には三、二と一、一は民間信用。ただ、それは最終妥結でしてね、一九六四年ぐらいまで待たなきゃならんわけです。

――このことについて、池田首相は当時、ヨーロッパ歴訪中でしたが、帰ってきてから大平さんに、「何で俺に詳しく相談しないで、お前はやったんだ」と言って、えらく怒ったという話があるんですね。

菊地　それは可能性がありますね。それはね、大平さんも非常に気にしているからこそ、しょっちゅう会談の途中で出てきて、秘書官室から官邸へ電話したんですから。その時は私はうっかりしていて、これは池田さんの諒解を取ってるんだなと思ったけど、確かに池田さんはいなかったんですね。

――この間、総理秘書官だった伊藤昌哉氏に話を聞いた時に、伊藤さんは「池田さんのグランドデザインは、大平さんと違っていた。池田さんは、まず日中を動かしてから日韓をやるというのが、日本のアジア戦略だ。先に大平が韓国と手を打ったんで、俺の考えが狂ったというようなことで怒ったんだ。単に独断専行で決めたということを怒ってんじゃなくて、外交戦略が池田さんが考えてたのと、大平さんの考えとが違ったために、ひどく怒ったんだ」という解説をしているんですが。これはどうですか。

池田総理と大平外相の対韓外交戦略の違い

菊地　大いにあり得ますね。それは伊藤さんのことですから、本当によく内容を知っているはずですからね。ただそう言った時の池田さんが、本当に深刻にそう思ってたのか、ないしは池田さん一流の半分シーリアスな言い方だったかどうか、これはちょっと疑問が残りますけどね。大平さんだってね、別に韓国を格別好きなわけではないですよ。あの人は、親韓派じゃありませんし、それから朴正

熙という人に対しても、軍人出身だからしょうがないんだろうが、どうしてあんなに強硬な、厳しいことをやらなくちゃいかんのかなーと言っていました。ただ、しかし自分は外務大臣だ。この請求権問題は、向うから持ってきた以上、自分が解決しなければいかん。しかも自分は経済問題、財政問題には詳しいと思っているわけですから、「これは俺がやる」と。大平さんという人は、よく「総理、あんた口を出さんで下さいよ」と時々、言う人ですから。まあ、そういうことがあったかどうか、これは私は確認する術もありません。

――私も、「池田総理は何かむきになって『俺が総理だ』と言って威張るんだよ、あの人は」ということを、大平さんから聞いたことがあります。

菊地　それは本当ですよ。ただ、日韓請求権交渉は大平外相の段階では、まとまらなかったわけですね。大平・金メモはできたけども、まとまらなかったわけです。ただ、ここで一般論として申し上げたいことがあるんですけど、大平さんが交渉したことで、大団円で非常にうまくまとまったというのは、あんまりないのですよ。日中国交正常化は唯一の例外だ。もう一つは、まあ日中航空協定だ。そのほかは全部、実らない話し合いをやっておられるんですよ。メキシコとの関係がそうですし、日米繊維交渉も……。

――石は打つんですけども、その石がどうなるかというのは分からんわけですね。

菊地　大平さんは、何か貧乏役でいつも捨て石になる交渉をすることが多いのですね。アイス・ブレーキングというか、最初の氷を砕く交渉をわりとするんです。大平さんは、ああいう人ですからね、自分が交渉を始めた以上は絶対、これはまとめなけりゃいかんというような、よく自民党の政治家に

あり勝ちな、いや世界中の政治家がそうですけども、自分がやる交渉は必ずまとめなけりゃいかんというような、型の考え方をする政治家ではなかった、ということを、僕は非常に、ある意味で感心しているんですよ。つまり、得てして政治家というのは、交渉を始めると「俺があれをまとめたんだよ」ということを言うために、みっともなく譲歩したり何かをする人がいるんですよ、国益を害してまで。大平さんは、絶対そういうことをしなかった。

――それで日韓交渉も、その後、池田さんが大野伴睦副総裁を特使にしてソウルに行ってもらったんですが、本当なら花を持たせるなら、前外務大臣として大平さんに特使で行ってもらうんですけど、そうはしなかった。これは挙げて国内の政治的な関係でしょう。党内をまとめるために、大野さんの顔を立てたということじゃなかったんですか。

菊地　そうですね、あの時、大野伴睦さんは自民党の副総裁で、非常にいろいろな所に出てくるのですよ。例えば一九六四年に台湾へ行くでしょう。あれも、党内の親韓、親台派である大野伴睦派に対する配慮から行っているわけですから。これも、今、思い出したんですが、金鐘泌氏と会う直前に、大平さんは大野伴睦副総裁を赤坂のホテル・ニュージャパンに訪ねてるんですよ。それで、これは大平さんの口癖だけども、「日韓外交も日日外交だ」というようなことで、非常に配慮していた。これは後から聞いたんですがね。「大臣どうでした」ということを、私はその時、珍しく質問したんですが、「いや、駄目だった。大野さんの側に読売の渡辺恒雄君が座っていてね、何にも話ができなかった」と言って帰ってきたのですね。

――渡辺恒雄氏は、大野副総裁の事実上の政治顧問なんですよ。彼自身も韓国へ随いて行くわけで

すよ。大野さんの側で「副総裁、こう言いなさい、ああ言いなさい」とやるわけですよ。

菊地　そうそう。

――ところで、一番最後に大きなヤマがきたのは、日中問題ですね。例の日中、日台問題で、倉敷レイヨンのビニロンプラントの問題、その後の周鴻慶事件の二つが引っからまって、台湾がまず大陸にビニロンプラントを輸出することが怪しからんと言う。それから、周鴻慶を送り帰したのも怪しからんということで、非常に日台関係が悪くなるわけですね。それで、結局、吉田茂元総理が台湾を訪問すると同時に、その後も吉田書簡というのを出されるわけですね。それで、一応、日台関係が修復されて、大平外相の台湾訪問ということになるわけですが、この時も党内を考えて、どういうふうに円く納めたらいいかということを、非常に苦慮されたんですか。

日中問題と日台関係に苦慮

菊地　あれは、大平さんが――こう言っちゃなんですけども――ほとんどイニシアチブというものを発揮しなかったじゃないかと思うんですね。それで、周鴻慶事件のハンドリングは、さっきちょっと触れましたけども、あれはあれで一応、台湾は怒りましたけども、あんまり後を引かなかったんですが、倉敷レイヨンのビニロンプラントの輸出に輸銀の輸出信用を付けるか付けないかの問題で、付けたのに対して台湾が抗議してきた。それに対して、大平さんに一九六四年の七月に行ってもらって、「これからは輸出信用は付けない」というようなことを約束して、台湾は満足しなかったかも知れな

いけど、一応まぁ収束したわけです。それで、吉田書簡の起案者は誰だと、よく言われるんですが、私は宮澤喜一さんだと思いますね。宮澤さんが、あの時は経済企画庁長官でした。あるいは、吉田さんが外務省の誰かに言って書かせたかも知れませんけども、それなら私は判るわけですから。ある日、突然、確か宮澤さんのところからだと思いますが、ドラフトが来たんですよね。

――それを大平外相が見たんですか。

菊地　見たんです。

――それで結構だと……。

菊地　結構だと言ったかどうか知らないけれども、まあ、そうだと思いますね。あれは吉田さんが二月に行って、あの書簡は五月付けで出てるんですよね。

――そうです。後から出てるんです。二月に行った時は、吉田さんは蔣介石総統以下、台湾の首脳と会って、「ヤアー、ヤアー」と言って、別段、交渉とか何にもないんですよ。それで五月に手紙が出てるんです。

菊地　その手紙は蔣介石総統宛ではなくて、張群秘書長宛てなんです。向うも、恐らくそういうふうに事務的にやってもらいたかったんじゃないですか。

――それで大平外相は七月だったか、暑い盛りに台湾へ行かれるわけです。実は私も一緒に行ったのですが、勿論、菊地さんも行かれた……。

菊地　いや、私は行かないです。森田一秘書が行きました。

――それから後宮虎郎アジア局長が行った。台北では木村四郎七さんが大使で、中田豊千代さんが

実公使で、この二人がコンビで全部やったんです。蔣介石総統との会談が終わった後、大平さんに「どうでしたか」と聞いたら、暫く「ウーン」と唸って「要するに一言で言えば、僕は今日は歴史上の人物に会ったんだ」と言われましたね。

就菊地　これは私が大平さんに非常に感謝してるんですけれども、あの時、直前に秘書官室に出てこられてね、「菊池君、今度は森田君に行ってもらうからね」と、ちょっと言われたんですよ。「あっ」と思って「そうですか」と言って、もう、その頃は任期の最後の頃でしたから、私もそうかなと思っていた。ちょっと考えてみると、やはりこれは、一つには大平さんが外務大臣として喜んで行くような任務ではない、ということを考えておられたことです。もう一つは、これは全く私の推量なんですけれども、この際は外務省当局の代表みたいな秘書官を連れて行っては、私自身の将来に、中国との関係で具合悪いことになっては困るというような、非常に親切な配慮もあったんじゃないか、ということです。後から考えてみて「大平さんという人は、随分、気配りのいい人だな」というふうに考えました。ですから、私が大平外務大臣時代に随行しなかった唯一の外国訪問ですね。それほど大平さんは、心ならずも行かれた。その時に、これはあまり公になっていませんでしたけれども、外務政務次官が毛利松平さんで、この人は親台派の権化みたいな人でして、やいのやいのせき立てましてね。それで結局、大平さんとしても行かれたのです。

華　それは勿論、その時は台湾と正常な国交関係がまだあるわけですから、外務大臣として行っちゃいけないということではなかったと思いますけれども、まあ世界の常識から言えば、あの頃、外務大臣

去が台湾まで行く、しかも何ていうか弁明外交みたいなことに行くというのは、もう気が進まなかった

んじゃないか、というような気がします。

――それに関連して、その少し前に大平外相が中国問題について国会で答弁しているわけですが、「世界中が祝福するような形になれば、日本も中国の国連加盟あるいは日中国交正常化を考えなければいけないのじゃないか」というようなことを言ってますね。「世界中が祝福するような形で」というのは、非常に文学的な表現だと思いますが、これは何ですか、やっぱり中国といずれ何かしなくちゃならん、ということを滲ませていたのですか。

外交のオーソドックス性を守る

菊地 そうだと思いますね。あれは一九六四年の二月一二日、社会党の穂積七郎さんが衆議院外務委員会で質問したんです。その時に、国連加盟国の中で、中共政権を承認する国がどんどん増えているじゃないかと。同時にアルバニア決議案というものに対する支持も、だんだん増えてきている。逆に言えば、重要事項指定方式が、だんだん危うくなってきているじゃないか、というような雰囲気の中で、そういう質問があったわけです。そもそも、大平さんがその時期、一九六四年の時点において、中国に対してどういう考えを持っていたか、ないしは、それ以前のそもそも中国に対してどういう考えを持っていたかということに関しては、一九七二年の国交正常化交渉の以前の段階では、正直のところ分からないというのが、真っ当じゃないかと思いますね。恐らく戦時中に興亜院から出向されて、蒙彊連絡部というところで張家口におられた。そういう程度の中国に関する親しみというのは持って

おられたと思いますが、一九四九年に中共政権ができてからの中国に対する大平さんの考え方というのは、具体的には出ていないと思うのです。

――外交のオーソドックス性を守ったということですか。

菊地　だけども、例えば一九六一年ですかね、日米共同提案で重要事項指定方式として、決議案というものを毎回、毎回通して、それで台湾国民政府の代表権を確保しておったという状況、つまり逆に言うと中共政権の代表権を否認し続けたということは、いかにも不自然だということは感じておられたんじゃないでしょうか。ただ、これはやはり全部、吉田レジームの遺産であるということであって、これは大平さんとしては、ないしは日本政府としては如何ともし難いということでして、これこそ外交のオーソドックス性ですね。外交の一貫性ということで維持したんじゃないかと思うんですね。その時の条約局長は中川融さんでしたね。国会答弁の振り付けは、全部、外務省が作ったものでした。それから、中川条約局長の答弁でずうっと終始したわけです。

――しかし、その当時であっても「中国を代表するのは台湾の国民政府」という考え方は、かなり無理があったわけですが……。

菊地　これはまあ大平さんと直接、関係ありませんけれども、私はその頃から、どう見ても一つのフィクションじゃないか、中国を代表するのは中華人民共和国じゃなくて、台湾の国民政府だというのは、いかにもおかしいのじゃないかということで、中川条約局長に「条約局長、あなた自身、一法律家として違和感を感じませんか」と直接、聞いてみたんです。そうしたら、その頃の外務省の考え方を表現していると思うのですが、その時、中川さんが言ったことで僕が非常に印象に残っているの

は、「菊地君、それはそうなんだよ。しかし、国家には意思というものがあるんだよ。それは国際法上の常識から言えば、中国本土を支配している中共政権が正当な政府であり、唯一の合法政府であり、しかも国連で代表権を持つべきだと思う」というようなことを言ったので、私は非常に感心したことがありますよ。その話は、恐らく私としては大平さんに言ったと思うんですね。ですから、そういうことで、これは吉田茂宰相の選択ではあったわけだけれども、それは一つの国家意思の表現であると。だから日本政府の外務省としては、それを支持しなくちゃいかん、ということだったんだろうと思いますよ。

――そして一九七二年のニクソン・ショック、ニクソン訪中、そして田中・大平訪中と日中国交正常化と進んでいくわけですね。

菊地　これが大転換を遂げるのは、いわゆるニクソン・ショックですね。一九七一年にキッシンジャー補佐官が中共をパキスタン経由で密かに訪問して、翌年の二月にはニクソン訪中が実現する。こういうことが、日本政府には物凄いショックを与えた。日本政府は当時、あまりショックを受けないような態度を取りましたけれども、これは誰が考えたって大変ですよね。これでもって、もうアメリカに対する義理は済んだ、というような感じがあったんじゃないかと思うのです。これは、大平さんがよく言うように、例えば「日中関係は結局は日日関係だよ」というような言い方と同様に、「日中関係、これは日米関係だよ」というような声が、ちょっと聞こえるような気がするんですね。そうすると、日米関係から規制された日中関係という縛り付けというのは、もうこれで解けたなということでして、それに一番最初に気が付いたのが、恐らく田中角栄首相だろうと思うのですね。田中さんは

実　「よしゃ、よしゃ。ワシが日中国交正常化をやってやる」ということで、大平さんも外務大臣として
就　国交正常化をやるわけです。その代わり、田中さんからは完全に任せてもらった。一切、あんた、口
華　を出してもらっては困るよ」と、例によって言ったんでしょうがね。（笑い）
去　――大平さんは外交というものが嫌いではなかった。むしろ外交が好きだったのではないですか。

大平さんは本当に外交が好きだった

菊地　これは田中角栄さんが言ったということになってるんですが、角栄さんが「いやー、大平君はあれで外交が好きなんだよ」というようなことを言ったそうですけれども。ここらは私も側で見ていて、大平さんというのは、本当に外交というものが好きなんじゃないかなと、あるいは外務省員にでもなりたかったんじゃないかなと、想像することすらあったんですが……。これも非常に小さな一例ですけれども、大平さんが外務省に来られて、前例を破ったことがあるのですよ。それまでは外務大臣というのは、在京の各国の大使館が催すナショナル・デー（国祭日）のレセプションには、一切、出なかったんです。というのは、おそらく外務省のプロトコールがすすめてですね、外務大臣という最高の外交責任者が、ある大使館のレセプションには行って、別の大使館のレセプションには行かないということになると――これは時間的なスケジュールの都合で必ず起こりますからね――そうなると必ず外交問題になる、不必要なトラブルを起こすというんで、「外務大臣は国際レセプションには行かないしという不文律ではないですけれども、そういうプロトコール上の決まりがあったんですが、

大平外務大臣は「わしは行くよ」と言って、時間が空いている限りほとんど行っていました。夜の宴会があるときも、その前にちょっと寄って、その大使と二言三言、言葉を交わしてから、興味があれば勿論、少し長くいたかも知れませんけども、次の予約会に移る。大平さんご自身、梯子が得意でしたからね（笑い）。そういうのは、ちっとも気にならないんです。それで、各国外交団に非常に評判がよくなりましてね。それは、外交というもの、外国の人との接触が好きでなければ、できないことですから。これは、一つ言えるんじゃないか、そういうふうに思います。

（平成一一年一二月一五日、大平正芳記念財団事務所で取材）

池田内閣の外相時代

菊地清明（きくち・きよあき）　一九二二年、宮城県生まれ。四四年東大法学部卒、四六年外務省入省、五〇年ワシントンＳＡＩＳに留学、六二年在米大使館勤務から大平正芳外務大臣の秘書官、六四年米国カナダ課長、在独、米大使館勤務のあと経済協力局に審議官、局長として七年間連続勤務。七八年駐シンガポール大使をへて大平正芳内閣で外務審議官としてサミット・シェルパに就任。八二年から駐メキシコ、駐カナダ、国連各大使を歴任後、八八年退官。以後、九九年まで松下電器産業顧問。